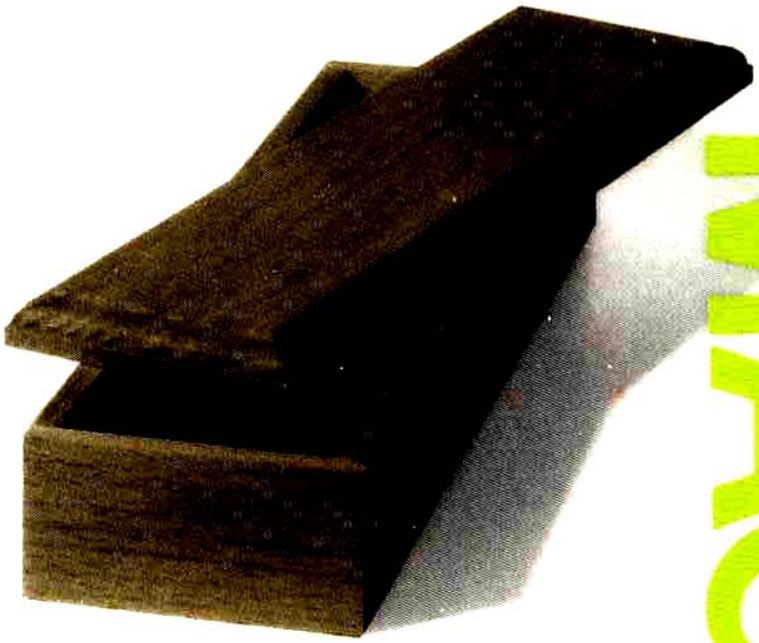
ILLUSION ACTS

森博嗣

記号を覚え、
数式を組み立てることによって、
僕らは大好きだった
不思議を排除する。
何故だろう？



幻惑の死と使途

MAGIC

Hiroshi Mori

視覚障害その他の理由で活字のままでこの本を利用出来ない人のために、営利を目的とする場合を除き「録音図書」「点字図書」「拡大写本」等の製作をすることを認めます。その際は著作権者、または、出版社まで御連絡ください。

N. D. C. 913　400p　18cm

幻惑の死と使途

一九九七年十月五日　第一刷発行
一九九七年十一月五日　第二刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに表示してあります

著者—森博嗣
© HIROSHI MORI 1997 Printed in Japan

発行者—野間佐和子
発行所—株式会社講談社
東京都文京区音羽二-一二-二一　郵便番号一一二-〇一
編集部〇三-五三九五-三五〇六
販売部〇三-五三九五-三六二六
製作部〇三-五三九五-三六一五

印刷所—廣済堂印刷株式会社
製本所—大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第三出版部あてにお願い致します。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-181987-9（文三）

幻惑の死と復讐

博嗣

ODAMSHA NOVELS

講談社ノベルス

江苏工业学院图书馆
藏书章

ブックデザイン＝熊谷博人
カバーデザイン＝辰巳四郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

第１章：奇趣の予感――――9

第３章：奇絶の舞台――――56

第５章：奇怪な消失――――103

第７章：奇想の舞台裏――――148

第９章：奇巧の仮説――――206

第11章：奇瑞の幕間――――241

第13章：奇抜なサービス――――257

第15章：奇術の使徒――――298

第17章：奇跡の名前――――320

ILLUSION ACTS LIKE MAGIC

by

Hiroshi Mori

1997

いいかね、与志君。《百匹の蛸の足の変化》というのが、その操作の名称なのだぜ。つまり、計測器が第二段へ切り換えられると、すでに分解と腐敗がはじまっている死者の脳裡にあるゾンデの内部から目に見えぬほど微細な金属の足が急に周囲へつきだされ……そして、忽ち、何処かへ消失しかかっている《もはやわれならざるわれ》をそのあたり一面にはった網の目のなかにとらえてしまうのだ。

（埴谷雄高／死霊）

第1章　奇趣の予感

1

生い茂る森林に挟まれて、緑の広場が細長く延びている。緩やかに起伏を繰り返す大地は、ずっと奥まで芝に覆われ、慎み深い空気が、まだ靴を濡らすほど湿っている。無慈悲な日射に曝されるまでの静けさが、あった。

朝は、何もかもが幼い。

太陽が周囲の樹々を乗り越える頃には、大地は変色し、日焼けした子供たちが集まってくる。その辛辣な終焉までが、朝だ。

男は、朝が好きだった。

そこは「緑地」と名づけられている。その名称は何を意味しているのだろうか。周囲の森林は、「市民の憩」という名の旗印と、隣接するゴルフ場の「自然環境」と呼ばれる煙幕のために、つまりは、この一帯だけ手つかずで残された安物の「雑地」だった。

それでも、男はそこが好きだ。

早朝の公園の散歩道を、彼は歩いている。

それは日課といえるものだった。男はゴルフをしたことがない。家族連れで出かけたこともない。そもそも、仕事以外に楽しみを見つけようと考えたことなど一度もなかった。

毎朝、この緑地公園にやってきて、三十分ほど森林の小径を歩くことでさえ、仕事だった。それは、実にクリエイティヴな時間であり、彼の仕事の最も重要なプロセスの一つだったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新しい発想。そして工夫。
それらを具体的な形にするプロセスである。もう三十年間も、彼は考え続けてきたのだ。
天職だと思う。
いつもどおり、ちょうど半分ほどの道のりで、池のほとりを見下ろすベンチに腰掛け、男は煙草を吸う。夏でも冬でも、ここで煙草を吸う。毎日同じだった。
少し汗をかいている。
鬱蒼とした樹々の枝葉に囚われたまま逃げ出せない夜の空気が、まだ周辺に残留している。池の向こう側に小さく見えるマンション街の焼けたアスファルトとは別世界の冷たさがあった。
小径を歩いてくる犬を連れた少女に出会う。
最近、一週間に一、二度、その少女と、そして彼女の犬と、男はこの場所ですれ違った。目が合えば、お互いに軽く表情を変えるくらいで、話をしたことなど、もちろん一度もない。
ベンチに腰を掛けている老いた男を、少女はどんなふうに見ているのだろう、と彼は思う。
少女は、有里匠幻を知っているだろうか？
知っているに違いない。
日本で最も有名なマジシャンなのだから。
いや、知らないかもしれない。
彼の人気のピークは、既に十年もまえに過ぎている。
だが、たとえ知らなくても……。
いずれ、知ることになるだろう。
きっと……。
僅かな音に、男は振り向く。
池面に魚の跳ねる音か……。
頭上に、鳥の鳴き声。
少女は、もう遠くを歩いている。
男は彼女が見えなくなるまで、そちらを見ていた。
誰が掃除をしているものか、錆びついた灰皿の缶

がベンチの横にぶら下がっている。彼は短くなった煙草を投げ入れ、ゆっくりと立ち上がる。最近、足腰が弱り、こうして一度休むと立ち上がるのが辛かった。

彼は背伸びをして深呼吸する。そして、両手を広げ、指を動かしてみる。

彼の手は大きく、指が長い。幾つもの幻想を生んだその手も、今では皺だらけで、弾力に乏しかった。機敏に、しなやかに、そして優雅に変幻した指先も、もう思いどおりにはならない。

しかし、それがマジックのすべてではない。

彼はそれを知っている。

そう、すべてではない。

男は、大切なものを仕舞うように、両手をポケットに入れ、歩き出した。

人々はマジックを望んでいる。

きっと、望んでいる。

人間は幻惑されたい生き物なのだ。

それが、すべてではないか。

もし、そうでないのなら、彼はもう終わりだ。

生きているうちに、それを確かめてみたい。

あの可愛らしい少女も、きっと幻惑されるだろう。

有里匠幻に……。

日本中の人々がきっと幻惑される。

そして、誰もが心に刻むことになる。

偉大なマジシャン、有里匠幻の名を。

彼の名前を。

2

シロナガスクジラの一家が泳ぎ回れるほど、ロビーは巨大だった。ガラス張りの吹抜けの空間で、屋外から侵入した眩しさは乱反射して無数の影を造形している。特大の金魚鉢かプリズムの中にいるようで、圧倒されるというよりは、落ち着かなかった。

マジシャンの箱に突き刺された真っ直ぐな銀の剣のように、この巨大な空間を斜めに突っ切るエスカレータ。ガラス面とは反対側の高いコンクリートの壁には、最近ではお約束のスカイ・エレベータが三列。行儀よく平行に並んだその垂直のレールを、ときおりオレンジ色のカプセルが滑らかに移動している。

見上げると、竹で組まれた数十メートルもあるオブジェが、何本もの細いワイヤで高い天井から吊るされていた。どんな形状をしているのか、下から見ただけでは、よくわからない。おそらく、三角関数を組み合わせて再現できる曲面を、「人間の狂気」あるいは「経済的な妥協」という不等号で切り取った断片であろう。この手法以外によって作られた人工物は、いまだかつてないからである。

芸術文化センタのメインロビーの正面玄関から入ったばかりの簑沢杜萌は、巨大空間に停滞した冷たい空気に一息つき、すぐに友人の姿を探した。約束の時刻に五分ほど遅刻だった。

長いエスカレータの下に幾つか並んでいたベンチの一つから、一人の女性が立ち上がる。彼女は片手を広げながら近づいてきた。顔を見るのは二年ぶりであるが、すぐにわかった。

「ごめんね、遅れて」杜萌は駆け寄って言った。「新幹線が少し遅れたものだから」

「お久しぶり」友人は微笑む。

懐かしい親友、西之園萌絵は、軽そうなコットンの白いバッグを肩に掛けている。カジュアルな服装であったが、淡いピンクとオレンジのストライプの小さなTシャツに、これ以上はないという真っ白なベストとスラックスで、相変わらず人目を引くファッションだった。彼女は夏だというのに、顔も腕も真っ白で、アイシャドーと同じ紫っぽい口紅がよく似合っている。

「杜萌、髪が長くなったわ」萌絵は弾んだ声で言う。彼女の仕草も本当に弾みそうだった。

そう言う萌絵の方も、以前に比べて髪が長い。
「ここ、初めて……、私」杜萌はロビーの高い天井を見上げて呟く。「すごいわね……。あのぶら下がってるの、いったい何のつもりなのかしら？」
芸術文化センタは、愛知県立美術館のあった場所に建てられた新しい施設である。杜萌は、ここがどんな機能を持った建物なのか詳しくは知らない。美術館とオペラが上演できる大ホールがあると聞いているだけだった。とにかく破格に大きな建築物であることは確かだ。バブルの時代に計画されたものだろう、と杜萌は考えた。
「あれね……」西之園萌絵も天井のオブジェを見上げている。「何かしら……。簾かなあ……。掃除が大変そう」
「天の川のイメージかもね」杜萌は口もとを上げる。「まったくさ、日本も豊かになったよなあ」
「お年寄りみたい」萌絵が微笑む。
「そうだよう」杜萌は目を見開いて頷いた。
「八階で美味しいケーキが食べられるの」萌絵がエスカレータの方へ歩き出しながら言う。「お腹空いてない？」
「その手の提案を、私、今までに断ったことなんてないよ」杜萌はあとに続く。
「そう、私って、杜萌に何かを断られたこと、一度もないわ」萌絵もにっこりとする。彼女の相変わらずの笑顔に、杜萌はずいぶんほっとした。
二人は長いエスカレータに乗る。一気に四階まで上がれる特大のエスカレータだったが、それでも、メインロビーの吹抜け空間の半分ほどの高さまでしか到達できない。彼女たちの他には、誰も乗っていなかった。平日の午後である。ロビーに見える人々も疎らで、贅沢な静けさが感じられる。
「萌絵、就職は決まったの？」杜萌は、二段ほど上にいる友人にきいた。
「ううん」萌絵は首をふった。「私、大学院に行くつもり」

その返答を杜萌は予期していた。西之園萌絵は就職する必要などまったくない。だが、彼女の性格からして、いずれは何かの職業に就くことも間違いないし、それがどんな仕事なのか興味があった。

「じゃあ、ひょっとして入試が近いんじゃない？」

「ええ、来月の終わり」萌絵はエスカレータのベルトにもたれかかった姿勢で答えた。

「来月って……、今日で今月は終わりよ。貴女、こんなところで、のんびりしてていいわけ？」

「のんびりしてないもの」萌絵は魅力的に微笑んだ。

西之園萌絵は、杜萌の高校のときからの友人である。私立の女子校で、中学と高校の六年間のうち、一度だけ同じクラスになったことがある。二人の名前に、共通する漢字が一字ある点も親近感を持った要因といえる。だが、単に同級生という以上に、西之園萌絵の存在は、杜萌にとって重要だった。

中学・高校の六年間のうち、最後の一年半の間だけ、簑沢杜萌は学年でトップの成績を維持することができた。何故なら、その一年半は、西之園萌絵がいなかったからだ。

萌絵は、高校二年の夏、両親を飛行機事故で亡くした。そのショックで彼女は入院し、長期休学したために、杜萌が卒業するときには、一学年下のクラスにいたのである。

四年半の間どうしても勝てなかったライバルが、急にいなくなってしまったことが、最初、杜萌は嬉しかった。定期試験はもちろん、実力試験でも、杜萌は飛び抜けていた。ずっと気になっていた目の前の障害が突然取り除かれ、彼女の行く手に希望が開けたかに見えたのである。

けれど、半年もすると、不意に虚しくなった。

自分の栄光も希望も間違いだと気づいた。いや、それはあとから理解したことで、そのときは単に、理由もなく寂しくなっただけだ。

勉強も急に手につかなくなり、何もかも突然つま

らなくなった。大学受験を目前にして、杜萌は悩んだ。日に日に脱力感は支配的となり、一ヵ月ほど毎晩、ただぼうっとしてベッドで寝転がっていた。

火の消えた花火の焦げたビニルみたいに、切なかった。

何のために勉強しているのか。これからの人生に楽しいことなんてあるのか。そんな漠然とした不安だった。杜萌には親しい友人もいなかったし、家族はもっと複雑な問題を抱えていた。誰にも、自分自身にも、その不安定な状態の原因が説明できなかったのである。

同じクラスだったときにも、ほとんど話をしたことがなかった西之園萌絵を見舞いにいったのは、今にして思えば、杜萌の人生の大きなハードルだった。何故かその障害を飛び越えてみようと思ったのだ。そして、あの日以来、杜萌は自分を取り戻し、安定したといって良い。

那古野市内の病院に西之園萌絵を訪ねたのは、夏休み。模擬試験のあった暑い日の夕方だった。

病室に入ると、萌絵は普段着で、ベッドではなくソファに座り、本を読んでいた。彼女はとても病人には見えなかった。

あとからわかったことだが、萌絵がそこに入院している理由は、単純だった。彼女は、自宅にいることができなかったのである。萌絵自身が「ホテルでもどこでも良いの」と表現したくらいだ。幼い頃から両親とともに過ごした屋敷に、西之園萌絵は二度と帰れなかったのである。

だが、その日の萌絵は、怯えている少女には見えなかった。窓からの陽射しで逆光となり、彼女の長い髪の輪郭だけが光っていたが、その表情に陰りはない。

驚くべきことに、萌絵は、杜萌を覚えていなかった。制服を着ているのだから、少なくとも同じ学校の生徒であることはわかったはずだ。最初は、ショックで記憶喪失になっているのかとさえ疑ったが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com